

## 第6回 浪士組の上京

### —「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅠ—

巻島 隆

#### はじめに

「文久記聞 九」の家茂上洛、浪士組に関連する記述を読みます。

第1回 くずし字に触れる

第2回 読むための基礎知識

第3回 「和宮下向ニ付、助郷取極」(伊勢崎市図書館蔵)を読む

第4回 今井区有文書(赤堀歴史民俗資料館蔵)を読む

第5回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅠ

第6回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅡ

第7回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅢ

第8回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅣ

#### 1 用語

**縁類(えんがわ)** = 座敷の外側につくられた板敷。城中詰所の一部。

**昧死(まいし)** = 昧はおかすの意。死を覚悟で真実を天子に直言すること、上奏文に使用する決まり文句。

**靖献(せいけん)** = テキスト 65 頁の中では「請献」で表記。「自ら靖じ、人自ら先王に献ぜん」(書経)。臣下として義に安んじ、先王の霊に誠意をささげること。

**浪士組** = 文久2年(1862)に幕府が浪人を募集して将軍家茂警固のために組織。清河八郎の発案。宮地正人『歴史の中の新選組』(岩波書店、2004年)巻末の「浪士組・新徴組隊士出身別一覧」によると、浪士394人が確認される。全国から応募があり、中には博徒も含まれた。上京後、清河八郎の画策により尊王攘夷実行の先兵の組織に変わろうとしたが、反対した近藤勇ら試衛館道場の一派と芹沢鴨らが壬生浪士組(のちに新選組、会津藩お預かり)を結成。江戸へ帰った浪士組は新徴組に改組され、庄内藩お預かりとなる。板倉勝静の指示により清河は佐々木只三郎により暗殺される。

**清河八郎** = 1830—63、出羽国田川郡清川村の豪農出身の尊王攘夷活動家。弘化4年(1847)、干支に出て古学の東条一堂に入門、嘉永4年(1851)に北辰一刀流の千葉周作に入門。安政元年(1854)、神田三河町で文武塾を開く。安政2年、母に同行して西日本を旅行し、道中記「西遊草」を著す。文久2年(1862)、攘夷挙兵を計画するが、寺田屋事件で頓挫。浪士組を発案、上京後に浪士組を尊王攘夷の実行部隊にしようとするが、果たせずに江戸に戻ったところを幕臣の佐々木只三郎により殺害される。

## 2 徳川家茂の上洛行程

以下、黒板勝美編『新訂増補 續徳川實紀 第四篇』（吉川弘文館、1936年）による。大方は六時半（午前7時頃）に出立し、七時（午後4時）か七半時（同5時）に到着して宿泊。家茂は所々で駕籠、歩行、乗馬。途中でこまめに小休を入れる。

文久3年（1863）2月13日 江戸城を出立。大手門を出て御畳蔵前、大名小路、数寄屋橋御門を通過、九時前に東海寺に到着し、「御昼御膳済」。品川宿で休み、七半時に川崎宿本陣に到着し、泊まる。 **\*浪士組は2月8日に江戸を出立。**

2月14日、六時半出立。戸塚宿に泊まる。

2月15日、六時半出立。四時過ぎ、藤沢宿の清浄光寺で休む。大磯宿に泊まる。

2月16日、六時半出立。小田原宿に泊まる。

2月17日、六時出立。早雲寺で休む。九時過ぎ箱根宿本陣で御昼休。三島宿に泊まる。

2月18日、吉原宿富士山別当東泉院に泊まる。

2月19日、五半時、富士川急流御渡船。興津宿、清見寺に着、泊まる。九時前に由比宿で御昼休。

2月20日、駿府城代屋敷に泊まる。

2月21日、久能山御参詣。

2月22日、安部川を連台で渡る。九時頃、岡部宿で御昼休。藤枝宿に泊まる。

2月23日、四時過ぎに大井川を連台で渡る。九半時過ぎ、金谷宿で御昼休。掛川宿で泊まる。 **\*この日に浪士組が中山道で京都に到着。**

2月24日、九時前に見附宿で御昼休、ここから乗馬。天竜川渡船。浜松宿に泊まる。

2月25日、「松平伊豆守より為御馳走差出候御舟ニ而新居 御渡海」。吉田宿龍拈寺に泊まる。

2月26日、三河国法蔵寺（愛知県安城市、家康幼少時の修学所）に立ち寄り、御宝物を見る。藤川宿より歩行。九時前に赤坂宿本陣で御昼休。岡崎宿に泊まる。

2月27日、熱田宿尾張殿浜屋形にて泊まる。

2月28日、萬場川渡船。九時半頃に佐屋宿本陣で御昼休。桑名宿本統寺で泊まる。

2月29日、四日市宿の多羅尾民部出張陣屋で泊まる。

2月30日、四半時過ぎに石薬師宿本陣で御昼休。亀山宿に泊まる。

3月1日、関宿本陣で御小休。筆捨山で野立。土山宿に到着。大坂より小笠原長行が出迎え。土山宿に泊まる。

3月2日、石部宿に泊まる。

3月3日、大津宿御代官石原清一郎陣屋で泊まる。

3月4日、五時過ぎに二条城着御。御玄関前にて松平春嶽、松平容保が御目見。御玄関御拭板の辺で徳川慶勝、一橋慶喜が出迎え。午下刻、御黒書院で万石以上の面々と御目見。

3 浪士組の上州出身者

宮地正人『歴史の中の新選組』（岩波書店、2004年）  
巻末の「浪士組・新徴組隊士出身別一覧」の上州部分

68	岡戸小平太	武蔵国江戸	43	30歳とも。上京浪士組、先番・道中世話役、文久3年9月12日現在新徴組隊士。
69	勝野保三郎	“ “	25	旗本阿部四郎五郎の家臣勝野豊作二男、上京浪士組、4番組第1小隊、文久3年4月19日脱退、同年11月、下野国足利郡江川村に滞在していた坂井友次郎と同道、上京する。その後本圀寺党に入る。豊作は安政大獄の被疑者ゆえ、幕府より追及せらる。
70	川崎渡	“ “	23	上京浪士組、7番組第2小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、元治元年1月新宿において松平近江守廻り先にて捕縛、明治元年2月脱走。
71	藤堂平助	“ “	22	20歳とも。上京浪士組、6番組第3小隊、京都に残留して新選組を組織、慶応3年11月18日油小路にて新選組に殺害せらる。
72	殿内義雄	“ “	35	上京浪士組、7番組第3小隊、京都に残留、文久3年3月24日、暗殺される。
73	仁科五郎	“ “	29	曲淵安芸守家来仁科理右衛門子、上京浪士組、4番組第1小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。明治8年8月現在庄内在住の仁科理右衛門は関係者か？
74	鴉田乾	“ “	22	江戸本所五ツ目住浪人鴉田蔵太子、庄野伊左衛門の徴募に応じ、浪士組帰府直後に入隊した有志の一人。文久3年9月12日現在新徴組隊士、慶応元年5月町奉行所へ引き渡さる。無頼旗本青木弥太郎の金銭強談事件に関与したため。この際の名は倉之助となっている。
75	古川軍三	“ “	44	元日光宮家来宝月清之助子、浪士組江戸出発後に水戸浪士と称し江戸にて入隊した有志の一人、明治元年庄内入り。
76	山本武右衛門	“ “	30	松平駿河守(旗本)元家来岩崎敬助子、浪士組江戸出発後に水戸浪士と称し江戸にて入隊した有志の一人、文久3年4月御組入、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。

234

77	天野静一郎	武蔵国江戸	34	鈴木頼母元家来天野助右衛門子、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り、明治3年5月切腹。
78	喜瀬虎蔵	“ “	40	松平甲斐守(旗本)家来山本段兵衛二男、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。明治8年8月現在庄内在住の喜瀬英士は関係者か？
79	関根和三郎	“ “	21	文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。
80	藤井健助	“ 江戸	51	御目付支配御小人藤井三左衛門子、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。
81	吉岡卓雄	“ “	不明	本多主税元家来吉岡理平子、文久3年9月12日現在新徴組隊士、小頭を務めている。慶応元年10月現在では悴俊三郎が跡を継いでいる。

82	新井敬一郎	上野国碓氷郡原市村	41	40歳とも。上京浪士組、4番組第3小隊。
83	小林長二郎	“ “ “	26	上京浪士組、4番組第3小隊。
84	田嶋陸奥	“ “ “	25	上京浪士組、4番組第3小隊。
85	中嶋政之進	“ “ “	26	上京浪士組、4番組第3小隊。
86	真下左京	“ “ “	22	21歳とも。上京浪士組、7番組第3小隊。
87	佐々木三三郎	“ “ 藤塚村	31	上京浪士組、先番。
88	武井三郎	“ “ 安中	38	35歳とも。安中藩主板倉主計頭元家来、文久3年2月4日小頭に選任、上京浪士組、7番組第2小隊、同年5月放逐せらる。
89	中沢良之助	“ 利根郡穴原村	27	百姓弥右衛門子、上京浪士組、6番組第2小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。
90	金子正玄	“ 勢多郡神戸村	28	21歳とも。文久3年2月4日小頭に選任、上京浪士組、6番組第

付録 浪士組・新徴組隊士出身地別一覧表

235

				2小隊小頭、文久3年9月12日現在新徴組隊士。
91	長沢千松	上野国勢多郡神戸村	17	長沢小松子、上京浪士組、6番組第2小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士。明治8年8月現在庄内在住の長沢松弥は関係者か？
92	青木平六郎	” ” 佃村	45	上京浪士組、7番組第3小隊。
93	角田小兵衛	” ” ”	36	38歳とも。上京浪士組、4番組第2小隊。
94	高瀬忠三郎	” ” 草木村	31	30歳とも。上京浪士組、6番組第2小隊。
95	高橋丈之輔	” ” 赤城山	31	上京浪士組、4番組第1小隊、帰府後の4月5日、平田篤胤没後の門人となる。諱成重。明治元年庄内入り。明治7年6月熊谷県に貫属替の高橋丈一郎は同人か？
96	前川太三郎	” ” 荻原村	41	40歳とも。上京浪士組、6番組第2小隊、文久3年8月30日脱退を許可される。
97	石原辰三郎	” ” 宝沢村	27	上京浪士組、6番組第2小隊。
98	今井佐太郎	” ” 米野村	38	百姓左兵衛子、上京浪士組、6番組第2小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。明治7年5月熊谷県へ貫属替の今井兼保は関係者か？
99	藺部為次郎	” 群馬郡前橋	22	邑楽郡館林住百姓次男(d)ともあり、上京浪士組、4番組第2小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、慶応2年4月出奔。
100	石原周碩	” ” ”	31	沼田藩主土岐山城守元家来(b)ともあり、上京浪士組、4番組第2小隊、姓は原(b)ともあり。
101	片山庄左衛門	” ” 高崎	29	児玉郡本町宿(b)ともあり、高崎浪士、上京浪士組、先番、狼藉取押え役。
102	高橋常太郎	” ” 波川村	41	47歳とも、上京浪士組、7番組第1小隊。

103	南雲平馬	上野国群馬郡沼田村	27	沼田村は「旧高田領取調帳」になし。あるいは江田村か？ 上京浪士組、2番組第1小隊。
104	間瀬清之助	” ” 新田村	41	瀬間(b)とあり、上京浪士組、7番組第2小隊。
105	下山由松	” 山田郡新田村	37	下新田村(b)とも。上京浪士組、4番組第3小隊。
106	広田孝三郎	” ” 市場村	31	上京浪士組、4番組第2小隊。
107	武井十郎	” 那波郡田中村	33	上京浪士組、2番組第1小隊。
108	森村東之助	” ” 連取村	25	24歳とも。上京浪士組、2番組第3小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、慶応元年7月24日乱心、喧嘩乱暴の上、8月29日切腹。
109	石倉久七	” 佐位郡伊勢崎	41	浪士、上京浪士組、先番、慶応元年3月不埒の儀有之、永牢中病死。
110	武田彦一郎	” ” ”	32	浪士、文久3年2月4日小頭に選任、上京浪士組、7番組第2小隊、弘と改名(b)、文久3年9月12日現在新徴組隊士、元治元年9月出奔。
111	武田本記	” ” ”	38	39歳とも。浪士、上京浪士組、2番組第1小隊小頭。
112	山口昇兵衛	” ” ”	32	伊勢崎藩主酒井下野守元家来山口左兵衛子、浪士組江戸出発後に水戸浪士と称し江戸にて入隊した有志の一人。文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り、明治8年8月現在庄内在住。
113	栗田口辰五郎	” ” 伊与久村	44	浪人栗田口左郎子、上京浪士組、2番組第2小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。明治7年5月熊谷県へ貫属替の栗田口善政は関係者か？
114	深町矢柄	” ” ”	33	百姓甚右衛門子、上京浪士組、2番組第1小隊、文久3年9月12日現在新徴組隊士、明治元年庄内入り。明治7年7月東京府へ貫

				属替の深町義知は関係者か？
115	新井久七	上野国佐位郡茂呂村	48	上京浪士組，2番組第2小隊，文久3年9月6日脱退を許可される。
116	石原伊之輔	“ “ 武士村	34	加納遠江守元家来(b)，浪人石原佐実子(d)，上京浪士組，2番組第2小隊，文久3年9月12日現在新徴組隊士，明治元年庄内入り。
117	斎藤文泰	“ “ 境町	27	泰造ともあり，上京浪士組，2番組第2小隊，文久3年9月5日脱退を許可される。
118	菅俊平	“ “ “	26	上京浪士組，2番組第3小隊，実名は村上俊平，帰府後水戸浪士と横浜を夜襲しようとし，追手をのがれて上京，文久3年10月捕縛され，六角獄舎につながれた。翌年7月の禁門の変の際に斬首。父は蘭方医で勤王家であった。
119	矢継右馬丞	“ “ 間之谷村	46	伊勢崎藩主酒井下野守元家来矢継禎之助子，上京浪士組，2番組第1小隊，文久3年9月12日現在新徴組隊士，明治7年10月より浅草俵町1丁目仁科雄吉方寄留の矢継亀三郎は関係者か？
120	高橋巨	“ “ 木嶋村	32	父は儒者，上京浪士組，2番組第1小隊，文久3年9月12日現在新徴組隊士，慶応元年11月出奔，出流山(いずるさん)蜂起に参加し慶応3年12月斬首。
121	桜井久米之進	“ “ 下植木村	35	百姓新左衛門子，浪士組江戸出発後に水戸浪士と称し江戸にて入隊した有志の一人，文久3年9月12日現在新徴組隊士，明治元年庄内入り。
122	石原熊太	“ 新田郡邑田村	21	20歳とも。上京浪士組，2番組第3小隊。
123	大川与一	“ “ “	39	上京浪士組，2番組第3小隊。
124	黒田桃眠	“ “ “	26	文久3年2月4日小頭に選任，上京浪士組，2番組第3小隊小頭，出流山事件で捕縛，明治以降は戸長などを務める。

125	野村伝右衛門	上野国新田郡邑田村	48	上京浪士組，2番組第3小隊。
126	浜野左一	“ “ “	38	上京浪士組，2番組第3小隊。
127	青木谷五郎	“ “ 市野井村	28	25歳とも。上京浪士組，2番組第2小隊。
128	高木泰運	“ “ “	28	上京浪士組，5番組第3小隊。
129	高木平右衛門	“ “ “	45	上京浪士組，5番組第3小隊。
130	吉岡谷三	“ “ “	30	百姓清兵衛子，上京浪士組，2番組第2小隊，文久3年9月12日現在新徴組隊士，明治元年庄内入り，明治8年8月現在庄内在住。
131	岡田盟	“ “ 本町村	42	文久3年2月4日小頭に選任，上京浪士組，先番兼小頭。その後無頼旗本青木弥太郎の一味の小倉庵長次郎と組んで金銭強談をおこなう。
132	橋常一郎	“ “ “	22	「信州中村百姓亀治郎子」(d)ともあり，上京浪士組，2番組第1小隊，文久3年9月12日現在新徴組隊士，明治元年庄内入り。
133	町田政次郎	“ “ “	29	百姓角太郎子，上京浪士組，2番組第1小隊，文久3年9月12日現在新徴組隊士，明治元年庄内入り。
134	高橋市三	“ “ 久宮村	45	久宮村は久々字村のこと。「秩父郡薄田村長次郎子」(d)ともあり，上京浪士組，2番組第1小隊，文久3年9月12日現在新徴組隊士，明治元年庄内入り。
135	橋場岩太郎	“ “ “	33	23歳とも。上京浪士組，2番組第1小隊。
136	石原嘉市	“ “ 大根村	36	上京浪士組，2番組第2小隊。
137	大館謙三郎	“ “ 上田中村	40	医者。文久3年2月4日小頭に選任，上京浪士組，2番組第2小隊小頭，離脱後慶応3年新田勤王党を組織し捕縛される。明治以

				降は郷里の文教振興に貢献。
138	河原孝輔	上野国新田郡矢嶋村	32	上京浪士組, 2 番組第 3 小隊。
139	贅田少吉	“ 邑楽郡館林	26	秋元家浪士, 上京浪士組, 5 番組第 3 小隊。
140	羽賀忠次	“ “ “	22	秋元但馬守元家来羽賀柳太郎二男, 上京浪士組, 3 番組第 3 小隊, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 慶応元年 12 月 12 日幕臣永島直之丞を切り, 同月 26 日切腹。弟巳之松が跡を継ぎ, 明治元年庄内入り, 明治 8 年 8 月現在庄内在住の羽賀義三郎は関係者か? 忠次は軍太郎とも称した。
141	園田幸助	“ “ “	20	秋元但馬守元家来高橋清幸子, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 明治元年庄内入り, 明治 6 年 5 月本所菊川町小川久太郎方寄留の園田貞次は関係者か? ✓
142	高田徳三郎	“ 緑野郡神田村	40	百姓太右衛門子, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 明治元年庄内入り。 ✓
143	吉沢徳之輔	“ 多胡郡多比良村	31	上京浪士組, 7 番組第 2 小隊, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 明治元年庄内入り。
144	田辺富之輔	甲斐国山梨郡於曾村	31	上京浪士組, 先番, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 元治元年 2 月依願永暇。
145	内藤矢三郎	“ “ “	29	45 歳とも。上京浪士組, 7 番組第 1 小隊, 帰府途中の 3 月 22 日下諏訪宿にて甲州巨摩・八代・山梨, 三郡の有志徴募の命をうける。元治元年 9 月, 病乱に付き親類鈴木道四郎へ引渡し。
146	辻隆介	“ “ 国府村	29	上京浪士組, 先番, 道中取締方。
147	内田佐太郎	“ “ 菱山村	23	百姓国五郎惣領, 上京浪士組, 5 番組第 1 小隊, 明治元年庄内入り, 明治 8 年 8 月現在庄内在住。
148	依田熊太郎	“ “ 下井尻村	22	20 歳とも。上京浪士組, 7 番組第 1 小隊。

149	中山武助	甲斐国山梨郡勝沼宿	35	百姓伊兵衛子, 山本仙之助の徴募に応じ, 浪士組帰府直後に入隊した有志の一人, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 明治元年庄内入り。
150	古屋常三	“ “ 別田村	30	百姓治左衛門子, 山本仙之助の徴募に応じ, 浪士組帰府直後に入隊した有志の一人, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 明治元年庄内入り, 明治 7 年 5 月山梨県へ貫属替の古屋晴朗は関係者か? 常三郎または常吉ともあり。
151	小田切半平	“ “ 小瀬村	37	百姓新六郎子, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 慶応元年 5 月町奉行所へ引渡し, おそらく無頼旗本青木弥太郎の金銭強談事件に関与したためか。
152	手塚要人	“ “ 七日市町	34	武田浪人, 村長手塚右兵衛子, 文久 3 年 4 月召抱え, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 槍術教授方, 明治元年庄内入り, 明治 7 年 2 月東京へ貫属替の手塚師子太郎は関係者か?
153	山本仙之助	“ 八代郡甲府	35	文久 3 年 2 月 4 日小頭に選任, 上京浪士組, 5 番組第 1 小隊小頭, 帰府途中の 3 月 22 日下諏訪宿にて甲州巨摩・山梨・八代, 三郡の有志徴募の命をうける。文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 同年 10 月 16 日組士大村達尾に親の仇として殺害される。元修験。
154	飯塚謙輔	“ “ 甲府	42	医者。小野派一刀流の遣い手, 飯塚新五右衛門子, 武田浪人, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 本人は追放され長男謙三郎が跡を継ぎ, 明治元年庄内入り。
155	石原新作	“ “ 藤井村	23	石原六左衛門子, 上京浪士組, 5 番組第 1 小隊, 文久 3 年 9 月 12 日現在新徴組隊士, 慶応元年 10 月 3 日市谷無縁坂にて殺害される。
156	若林宗兵衛	“ “ “	28	百姓勘助子, 上京浪士組, 5 番組第 1 小隊, 明治元年庄内入り, 明治 7 年 5 月山梨県へ貫属替の若林守信は関係者か?
157	雨宮仁太郎	“ “ 東原村	38	上京浪士組, 7 番組第 1 小隊。

後風で、三州長沢に住居、芝居でやる馬斬り長七郎の血統、云わば本来徳川の親類であるから、別に極まった領地もなく、控持として僅かに二十人扶持を買っているに過ぎなく、いけれども、江戸屋敷は牛込三合半坂にあり、いざと云え

上総介が登城して、浪士募集の建策を論じたらしく、あつて巧みに糸を引いているのは、庄内藩清川村の郷士清河八郎(正明)三郎。眼のぎょろりとした面長な人物、丈はすわりとして、武芸も出来たが学問も深かった。春嶽侯も老中の板倉周防守(勝静)もよくその事は知っている。要するに「浪士は集めて置いて取締るに限る」というので、直ちにこれに賛意を表し、十二月十九日に、上総介に対し

て、正式に浪士募集の沙汰を下した。  
此御政事向々御改革被遊候に付ては、浪士の内、有志の輩御集相成、一方の御固め可被仰付、尤薦と採索を遂げ、一旦の過失有之候か又は遊惰に耽候共、改心の上辰忠報の志厚き輩、既往の儀は出格の罪を以て御免しの儀も可有之候間、其心得にて名前取調、早々可申候事。

それにも係らず、清河は一日の休息もなく関西関東から奥羽の地方迄、足跡到らざるない程に活動した。しかもこの浪士募集の策に先立って、直接松平春嶽侯に奉った「急務三策」は、一に攘夷、二に大敵、三に天下の英才を教育する事ではあったが、すべて自己の目的を貫徹せんとするすめの策謀で、大敵によって、当時空屋に入っている同志を引出したかった事もあるが、それよりは、自分が両国で人を斬ってその罪があるので、これによって青天白日になつて、晴々と活動したかったのが大きな理由である。

浪士募集の段取りについては、すべて八郎の策に出で、同志、石坂周造、池田徳太郎の両名が、関東からずっと甲州の方面にかけ熱心に遊説を試みた。石坂は彦根の浪人、池田は基州の浪人だが、二人とも機略のすぐれた人物で、こういう事にはもつて来いの腕があつた。その頃は年に入つていたが、この仕事をやるために、赦されて出て来た。本来清河八郎は、攘夷討論者である。この大義を為すために、先ず自から犠牲にならなくてはならないという覚悟があつた。東奔西走、実によく旅行をつづけて、各方

子母澤寛『新選組始末記』(中央公論社、一九六七年)

清河八郎はその頃水戸にかくれていたが、形勢斯くの如しと聞いて、すでに十日に江戸へ入り、かねて懸念な山岡鉄太郎のところに寄寓していた。

こと迄持つて来る間の、清河の苦勞はまた並一連りのものではなかつた。前年、すなわち、文久元年の五月二十日、西国方八楼で書画会に名を籍りて、水戸の有志家と会合しての辰り道、日本橋横右衛門町の街上で、故意に喧嘩を売つた町人を無礼打ちにした。何しろ神田お玉ヶ池千葉葉周作の門人で、腕は利くし、少し酒に酔つてもいたので、一刀ざつと抜打ちに喰わせた。この時拵つた刀の勢いで、その首がすぐ前の瀬戸物屋の店へ飛込んで行ったといふことを、一緒に戻つた山岡鉄太郎が話していた。(銀舟長女松子刀自懸)そのために、つまりその時はお尋ね者の身の上であつた。

八郎の腹の中

面はこの議論を聞き廻り、文久元年以来は幕府の偵吏がその周囲につきまどつた。その頃よく、「一度他出すれば、首が一寸ずつ詰まる」などといつていたものである。

元年の十一月には、京に田中河内介を訪ね、侍徒中山忠愛中将に説いて「九州に於て尊王攘夷の義徒を募る」手書を書かせ、直ちに九州へ渡つて、頻りに策動した。二年四月二十三日、有名な伏見の寺田屋事件の異様はこの八郎で、これは義事に失敗した。この事象というのは、薩摩の藩士有馬新七以下六十幾名かが、藩邸を脱出して、この寺田屋に会食し、直ちに京都に入つて、九条菊白及び所司代酒井侯を襲撃し、閣下に奏して、攘夷の勅諭を賜わらんといふのである。

危機一髪に際し、藩主久光の命によつて、豪胆な奈良原喜八郎以下八名が、決死の覚悟でこの席に行き、奈良原は真っ裸になつて、一同の刀の下に、その中止を勧告した。格闘あつて、互に死傷を見たことは有名な話。

朝廷に関する度々の建白。その他、八郎の一挙一動は、

悉く、討幕の本志によるが、今度の浪士募集なども、素より人知れぬ深謀があるのである。

(1) 奈良原喜八郎は、後ちの男爵、明治十年頃には新橋煉瓦地の第一の遊び手であった。英者などに「金をやろう」といって呉れる盃の中には、酒の底に二分金がちらわらしている。新橋花月の真黒い子守が気に入ってこれを手に入れたりした。如何にも武士らしい豪放な姿だったところがあった。(新橋花月平岡得重翁談)

### 老中板倉周防守

近藤勇の一派は、土方、沖田、山南をはじめ、原田、井上、藤堂に永倉迄も加わって、浪士募集を聞くとすぐに半込二合半坂に松平上総介を訪ねて、募集の真意を聞いてみた。上総介はなかなか器量人で、攘夷の本旨から、春春は將軍家(家茂)に於かせられても御上落遊ばざるにように、今回募集の勇士は、その御警衛として京都守護に任ず

らその人数をきいて吃驚した。「少なくとも二百五十名、先ずそれ以上に相成るものと思われない」

これは困った、幕府では五十名と定めて、一人当り五十両、合計二千五百両の仕度金より下さららない、予算の五倍の人数では、どうも手も足も出ないので、その日に迫まると、松平は善後策もつけず、突然群職として終った。でも仕方がないので、俄かに目付をした鶴殿甚左衛門鳩翁を浪人取扱として、旗本山岡鉄太郎、松岡方を取締に任命し、兎に角、伝通院内処断院で会合を行った。

鶴殿は浪士一同にむかつて、手当不足の事情を告げ、「諸君は尽忠報國の士である、今更ら手当の多少によって如何という事はあるまいと信ずるけれども、もし御不平の仁は遠慮なくお引取り下さい」と申渡した。

清河ではどうも信用が足りないので、本当の浪士は集まりませぬ。そこで致し方なく近国へ出張して百姓や博徒などを集めました。

ところが幕府の方では集まった顔れを見て、これは

べきものである旨、雄弁に説いて聞かせた。素より一同に異存はない、すぐに参加の意を述べて、一先ず柳町の道場へ引取ると、先ず酒を買って一同、「いよいよわれらの時来れり」と夜を徹して祝杯を挙げた。

浪士お掛りをやっている老中、備前松山五万石の城主板倉周防守の腹では、先ずいどころをすぐり取って五十名というつもりであった。しかし、実際に募っている清河には、前にもいった通り策がある、この際何んでもいから集めて置こう、そして一つこれ思い切って自分に都合よく利用してやろうという考である。清河はともかく勤王家だ、幕府のために粉骨砕身する暇がない。第一、先にも申した通り文久元年五月に、西国であるの事件をやってからえ、取て公儀を恐るるところもなく、同年の冬には、中山前右中將忠愛卿の手書をふところにして、九州各藩を拳兵倒幕を策して砲つた程の人物である。心ある人々は怪しいと覗んだが、流石の閣老板倉もその時は、これははつきりと気付かなかつた。

明ければ文久三年、二月四日にいよいよ小石川伝通院で、新浪士の会合をやることとなり、松平上総介が、清河か

少し約束に違うと思いましたが、集まった方では又、すぐ旗本にでも取立てられる事と思っていたのに、一向その様子もないので、清河や右坂に喰ってかかります。無論その命令などは奉じません。

それで清河はじめ上総介までが、今で云えば責を負うというのでしよう、自から身を引いて、改めて幕府から、鶴殿鳩翁を頭に、山岡鉄舟、松岡方の兩人を取締に任命しました。(旧新選組結城無三翁遺談、明治四十五年五月十七日東京に於て歿す)

松平上総介は浪士募集取扱中「容合席」と認められ、手当は特に三百俵もらった。

### 木曾路を行く浪士隊

四日に会合して、六日には全部の編成を終り、一日間をおいて、八日にはすでに、一同京都へむかつて出発した。これは江戸の閣老が、集まった顔れを見て、永く江戸

へぐぐりさせておいては敵な事を仕出かさな、とにか  
く京都へやれば、ここの責任は無くならと考えたものら  
しく、一行二百三十四名、板橋宿から木曾路を通って、上  
洛する。

鶴殿も行くし、山岡も行く。清河八郎は、連名の中に名  
さえ出さず、たった一人本隊を離れ、高下駄をはいで、無  
反のすてきに長い刀をさし、隊の先きになり、後になり、  
ぶらりぶらりと基をいって行った。

隊は七つ。その外に取縮付というのがあった。

一番隊 伍長、根岸友山、山田官司、徳永大和三名。  
隊士二十七名

二番隊 伍長、武田元記、大館謙三郎、黒田桃現三名。  
隊士二十七名

三番隊 伍長、常見一郎、新見銅、石坂周造三名。隊  
士二十七名(近藤道場井上源三郎はこの隊に  
あった)

四番隊 伍長、齋藤源十郎、松浪良作、青木慎吉三名。  
隊士二十七名

五番隊 伍長、山本仙之助、森士銀四郎、村上常右衛  
門三名。隊士二十七名

じ、近藤が平隊士というのに、これらが俄かの二本差で伍  
長となっている。

仙之助は甲州古府中行蔵院の行者祐教の弟子上りで、  
ご祈禱をしては廻っていた法印である。云わば行者上りの  
無頼漢に過ぎない。

この祐天のために、弘化三年の秋、甲州 飯沢村で殺され  
た齋原来助といふ剣道修業者の伴大村遺尾というのが、漢  
然親の敵をさがして、この隊に応募し、勇のいる六番隊に  
参加して行った。十九歳の若ものである。

### 水府院藩芹沢鳴

道中、取縮付芹沢鳴の我儘は言語に絶した。神道無念  
流戸崎熊太郎の取立てで、而鏡役の免許者である。殊に  
力量人にすぐれ、平素「尽忠報国の士芹沢鳴」と彫った三  
百匁の鉄扇を握って、何か気に喰わないと、喉が裂ける程  
に怒号した。常陸芹沢村の郷士で、もと天狗党にいた。本  
名は木村継次、短気で我儘で乱暴で、一廉の人物には相違

六番隊 伍長、村上俊五郎、金子正吉、西恭助三名。  
隊士二十七名(近藤勇以下党この隊にあり)  
七番隊 伍長、宇都宮左衛門、大内志津馬、須永宗司  
三名。隊士二十八名

取縮付 芹沢鳴、池田徳太郎、齋藤熊三郎(清河八郎  
実弟)その他にて二十三名

### 祐天仙之助

近藤勇三〇等は、平隊士として軽々しく取扱われ、た  
だ黙々として歩をいって行った。土方歳三三九、永倉新八  
三〇、沖田総司三〇、藤堂平助三五、山南敬助三〇な  
ど錚々の劍客、何れも十把ひとからげとなつて、六番隊村  
上俊五郎の手付となつてゐる。

五番隊の伍長山本仙之助三は、甲斐のぼくち打ち、  
甲州一帯に繩張りのあつた香真師の親分三井の守之吉の後  
をついだ祐天仙之助で、子分二十名に賭場の用心棒をして  
いた甲州斐山の生れ内田佐太郎つれて、この募集に応

ないが、扱いかねる事が度々であつた。

天狗党時代、漸来の宿で、何か些さか気に喰わぬ事があ  
るといって、部下三名を土端場に並ばせておいて、片っぱ  
しから首を斬つたり、鹿島神宮へ参詣して、拜殿の太鼓が  
余り大きくて目触りだといつて、これを鉄扇で叩き破つた  
りしたものである。

部下と云えども人である、この斬殺二件で江戸へ引立  
られ、今の和田倉門の東に当たつた窟の口の評定所で調  
べられた時、牢内で絶食を断行し、小指を嚙み切つて、そ  
の滴る鮮血で、

雪霜に色よく花のきかけ  
散りても後に匂ふ梅が香

と、辞世の歌を書き、この血なまぐさい紙片を牢の前格子  
へ張つておいた。

\*

近藤勇は、取縮付池田徳太郎の手伝役として、道中の宿  
舎割を命じられて、本隊より一足早く、宿々へ先乗りをす  
ることになつたが、板橋、蕨、浦和、大宮、上尾、桶川、  
鴻ノ巣、熊谷、深谷、と行つて次の本庄宿へ着いた時、